



地方にも広がる日乗連活動

「航空安全シンポジウム」報道

2007年2月8日に鹿児島で開催された「航空安全シンポジウム in 鹿児島」が南日本新聞の取材を受け、9日付けの紙面に掲載されました。

日乗連事故解析委員会は、鹿児島・福岡・千歳など各地で定期的に地方シンポジウムを企画してきましたが、特に706裁判の支援活動の一環としてマスコミ関係者にも精力的に私達の主張を伝えてきました。

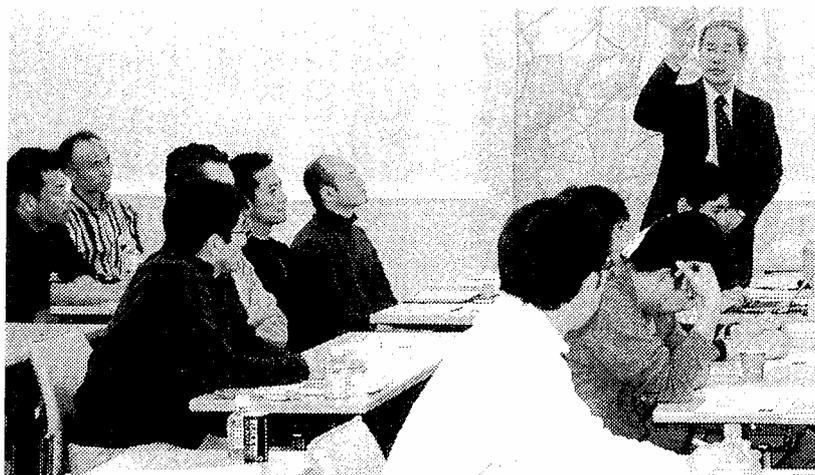
取り組みの成果は徐々に広がりを見せ、各地のマスコミは少しずつ理解を深めてきているようです。

今回は706裁判で無罪が確定した後でもあり、シンポジウム記事に関連して当該機長の談話も掲載されました。

鹿児島空港で航空安全シンポジウム

航空機事故などの事例から、鹿児島県内外のパイロットら約三十人が安全運航を学ぶシンポジウムが七日夜、霧島市の鹿児島空港ビルであった。

乗客乗員計十四人が重軽傷を負い、後に乗員一人が死亡した一九九七年の日航機乱高下事故で、業務上過失致死傷罪に問われ、今年、無罪が確定



安全運航に関して意見を交わすパイロットら 17日、霧島市の鹿児島空港ビル

した高本孝一機長(五六)は、経過などを報告。旧運輸省の航空事故調査委員会と刑事捜査の事実認定の違いに触れ、「事故調は再発防止に役立つなら、推定した事実でも認定できる。それが検証もされず捜査で証拠にされるのは問題。調査資料の目的外使用を制限する国際民間航空条約にも反する」と指摘。両者を分離する必要性を訴えた。日本エアコミュニティー(霧島市)労組は、同社のDH81400機の不具合が、情報蓄積と部品改善などで減少したことを示し「乗員、整備士らと会社、メーカーの情報共有を、さらに進めなければならぬ」とした。航空会社の乗員労組でつくる日本乗員組合連絡会議が主催した。

日航機乱高下事故 無罪の高本機長に聞く



航空機の安全運航を考えるシンポジウムがこのほど、霧島市の鹿児島空港ビルであり、一九九七年に三重県上空で起きた日航機乱高下事故の機長だった高本孝一さん(五十六)が講演した。乗客乗員計十四人が重軽傷を負い(後に乗員一人死亡)、高本さんは業務上過失致死傷罪に問われたが、今年一月無罪が確定した。安全運航の課題や事故調査のあり方を聞いた。

(霧島総局・桐原史朗)

安全運航シンポで来鹿講演

座席ベルト着用喚起を

「座席ベルトの非着用が被害を大きくしたとの指摘がある。」

「当時、ベルト着用サインは点灯中だったが、けがを負った客室乗務員(CA)と乗客は、一人を除いてベルトをしておらず、その一人の乗客も正しい着用でなかった。」

座席ベルト着用の重要性を話す高本孝一さん

霧島市

CAたちは調理室などでサービス用品の片付けや機内販売票の整理などをしていた。他社とのサービス競争と、売上額で昇進が左右される社内事情

機内販売票の整理などをしていた。他社とのサービス競争と、売上額で昇進が左右される社内事情

機内販売票の整理などをしていた。他社とのサービス競争と、売上額で昇進が左右される社内事情

機内販売票の整理などをしていた。他社とのサービス競争と、売上額で昇進が左右される社内事情

「安全教育の現状は。航空各社とも数年でやめたり転職する契約社員が増え教育に十分時間をかけられない。社内外で安全企画部門に

ニスを流したりテレビに報するなど、もっと装着への意識づけに努めるべ

に生かす。こうした報告書の、推定事実を根拠に刑事責任を問うのはお

は、管制官や整備士、航空大学の教官らが就く調査官の資質向上や技術蓄積・継承を図る体制づくりも必要だ」

Q ズーム
日航機乱高下事故
1997年6月8日、香
港発名古屋行き日航706
便MD11(乗客乗員180

人が、三重県上空で激しく上下に揺られ、天井や床にたたき付けられた乗客乗員計14人が重軽傷を負った

務上過失致死傷罪に問われたが、名古屋高裁は今年1月、操縦ミスを否定し、検察側控訴を棄却。検察側は上告を断念し無罪が確定した